

日本的なマンガを描きたい

— 中国人留学生 D さんにおける異文化理解と表現の的確さおよび洗練性 —

山崎てるみ※1

樫田 美雄※2

※1 高倉整形外科クリニック

t.yamasaki@ashinogeka.com

※2 神戸市看護大学

kashida.yoshio@nifty.ne.jp

I would like to draw Japanese-style comics “Manga” :

**Accuracy and refinement of intercultural understanding and expression in
an international student from China**

YAMASAKI Terumi

Takakura Orthopedic Clinic

KASHIDA Yoshio

Kobe City College of Nursing

Key Words: Manga, Intercultural understanding, International student

0. はじめに

本論文は、『現象と秩序』第4号に掲載された、「異文化理解が会話に現れる様子」¹の続編である。前作では、ロシア人留学生 M さんと我々とのインタビュー記録を取り扱ったが、本稿では、中国人留学生 D さんと我々とのインタビュー記録を取り扱う。分析は、エスノメソドロジー・会話分析的観点を参照しつつ、社会学の立場から行った。すなわち、本作は「異文化理解とその表現の実際」に関する社会学研究の第2弾である。

以下、最初に、今回の調査の枠組を述べておくことにしよう。我々は、2016年6月28日に、兵庫県神戸市内の学園都市駅そばの公共施設内において、中国人留学生（四川省出身の女性）の D さん（以下 D さんと記載する）に対しインテンシブなインタビュー調査を行った。日本の大学（外国語大学）に留学し、大学院で日本文化を学びながら、マンガ家としての活動も行っている D さんが、マンガ業界についてほとんど無知とってよい私たちに、マンガの専門家として語る場面中には、中国文化、日本文化、国際的なマンガ文化、現代の IT 社会、などの諸分野・諸カテゴリーへの総合的理解が現れている。それらを語る際の、D さんによる、国際性の処理の的確さや、自国である中国の文化と留学先である日本の文化とを比較し語る洗練の程度には、目を見張るものがあった。ポイントは、かならずし

も D さんが、日本語に十分な習熟をしていないことである。日本語の運用能力については、それほど高度のものをもっていないなくても、本人が使える範囲内のいろいろな言い回しや対比構造を用いて、「的確さ」や「洗練性」を、D さんはかなりの程度まで表現し得ていた。我々としては、この「D さんの巧みさ」をなんとか分析的に定位したく思われた。そのため、対話を転写文（トランスクリプト）に起こし、共同して解析を行った。以下は、我々の、その共同解析の結果である。D さんの巧みさをうまくすくい取ることに成功していれば、それは、複数文化にまたがって文化活動することのありようの解明としても意味を持つだろうし、幾分かは現代社会論としても意味を持つだろう。そのような展望につながる成果が上がっていることを希望している。

1. 日本でマンガを描くこと

1-1 日本的なマンガを描く

D さんは、中国国内において、幼少期より日本のマンガやアニメに触れて育っていた。そのことをきっかけとしてマンガ家をころざし、作品を画きつづけ、現在日本国内でマンガ家として活動している。D さんは、中国最大の SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）である Weibo（微博：ウェイボー）のマンガコンテストにおける受賞歴を持ち、中国の雑誌からマンガ連載の依頼を受けたり、日本のマンガ雑誌へ投稿したりといった日々をおくっている。専業というわけではないが、国際的なマンガ家である。D さんは、今後のビジョンについて次のように語る。

【断片 1】インタビュー A より²

なお、発話者記号は、右記のとおり。D:D さん、K:樫田、Y:山崎（以下、同じ）

1009D：わたし日本的なマンガをかきたい(.)ですので

1010K：なるほど

（中略）

1019D：はい(.)でも(.)やっぱり(.)日本(.)日本ですよね：：いまもう(.)つづけいくのも日本(.)
日本なんです(.)たぶん日本(.)日本から：：世界に発信(.)したい(.)とか

1020K：あはい

1021D：そういう(.)もし：：できれば(.)そういう(.)そういう目標が ありまして

（中略）

1029D：世界(.)なん(.)じゅう(.)こくの

1030K：はい

1031D：ことば日本訳(.)されてる(.)みたい(.)ですよね(.)ほんとにすばらしいですよ(.)日本の
マンガって

（中略）

1076D：でも(.)ほんとかかきたいのは(.)ちょっと(.)日本の(.)雑誌に(.)のれる(.)マンガをそそ

そう(.)そういうマンガがかきたいのです：：それをめざしてます

ここでは、Dさんがマンガを画くにあたり、日本的なマンガを画くことを志向していることが示されている。1019Dの発言において、Dさんは、「日本」という言葉を5回も繰り返しているが、それは、Dさんが目指す「日本的」(1009D)ということのなかに、日本で、日本のマンガ文化を継承して、日本の読者に受け入れられて、日本から発信して、等々の意味をなんとかニュアンスとして含ませようとしてのことであろう。「日本的」に含めたい多面性を個別の言葉で表現することができない語学力状況で、この5回もの繰り返しが発生したように思われる。つまりは、全体として、日本系で、日本産で、日本流で、日本発で、日本的なマンガを画いていきたい、という目標をDさんはここで述べているように思われるのである。

Dさんが現在日本で発表しているマンガは、日本語表記のものであるが、では何故、中国人であるDさんが、これほどまでに「日本的なマンガを描くこと」を重視するのであろうか。いささか外在的考察になるが、マンガ評論での議論を参照しながら検討していこう。

例えば、日本のマンガ作品について、海外で翻訳して刊行される際には、タテ書きの日本語がヨコ書きになることや、日本語からの翻訳が必ずしも同一性保持に成功したものになっていないことなど、私たちが読んでいる形とは、異なる形で作品が移出されている可能性があることが、大城ほか編(2010)によって指摘されている³。もし、Dさんが、来日して日本語を学び、日本的マンガ文化の日本国内でのあり方を知り、そこに、中国で翻訳出版されているものとは別の価値があることを見いだした場合には、すなわち、日本的でない日本マンガと、日本的な日本マンガの間にある落差を見いだした場合には、そのようなDさんが、自分の作品において、作家として、日本的なマンガを発信することに志向する、ということはあるようなことである。たとえば、Dさんが、自分の作品のあり方に言及する次の様な発言からは、そのような志向性が見て取れるのではないだろうか。

【断片2】インタビューBより

66D：hh：：自分が(.)自分がそんな表現に(.)興味があるから

67Y：あ：：あ：：そうか(.)自分の(.)マンガに(.)こう(.)どうという風に(.)なんだろ [反映

68D： [はい や

くにとつ

69Y：役に立つのよね

70D：はいはい

ところで、日本のマンガは文化として高水準なだけではない。日本のマンガは、産業としても成立している。つまり、ビジネスとして述べるならば、人気の出たマンガ作品は、雑誌や単行本等の活字媒体から、テレビアニメ等の放送媒体、そして、ゲーム等の他の媒体にま

で販路が広がっていく存在なのである。関連商品の売り上げなども利益源となり、場合によっては、一攫千金につながることもある。そういう市場性をもった商品としての質も、マンガ作品にはあることを D さんは、忘れない。D さんは、市場と結びついたものとしてマンガがあるということを、次の様に語っている。

【断片 3】インタビューBより

129D：でもいちばんマンガがさかん(.)さかんになってるときはたぶん 80 ねんだい(.)たぶん
そのことそんなに

130Y：かわってない？

131D：かわってないではないですけど：：：あの(.)マンガ(.)マンガはうれもの [売り物の意味か⁴] としてつくります

(中略)

492D：なめされてる？っていうかんじが(.)でも(.)すごく(.)おかねもうけとしては

493Y：う：：：ん

494D：マンガ家はすごいとおもいますよ

日本では、2013年に、官民共同出資のファンドである海外需要開拓支援機構（クールジャパン機構）が設立されているが、クール・ジャパンの売り込み項目の中には、マンガとアニメがはいっており、海外でのクール・ジャパン関連イベント等でもよくとりあつかわれている。⁵現在、日本におけるマンガ市場は紙の市場と電子書籍の市場を合わせ約 4570 億円と言われており⁶、アニメ・マンガは文化産業の一つとして、大きな期待を背負っている。このように、日本のマンガは国家的な戦略的輸出商品の一つとして存在しているが、おそらくは、このような社会的背景と D さんの発言は結びついているのだろう。

次に、日本で日本的なマンガを描くことを切望する D さんが、マンガ制作活動をする場所や、今後のビジョンについて語る場面をみていくこととしよう。

1-2 マンガ作家として活躍する場所の選択

D さんの日本留学には、二つの目的がある（と本人が述べている）。一つ目は、日本文化を学ぶこと、そして、二つ目は、マンガを描くことである。後者の目的を重くみるならば、マンガの制作に関する利便性から、留学先（日本国内での居住地）は、日本の出版社が多く集まる東京あるいは東京近郊が望ましい、ということになるだろう。しかし、D さんは、神戸で暮らしている。そして、東京で暮らす必要性はなく、マンガを描く場所はどこであろうと構わない、と、次のように語るのである。

【断片 4】インタビューAより

1168D：ど：：：あの(.)マンガ家はちょっと場所とは関係してる(.)ではない(.)ですよ な

日本的なマンガを描きたい

1169K：あ：：

1170D：とうきょってちょっと(.)便利な(.)条件が(.)ありまして(.)それだけ

1171K：それだけ

1172D：はい

1173K：：：まあね(.)今じゃ(.)ファックスもあるし(.)電子メールもあるし

1174D：そうですね

1175K：投稿するのには困らないですもんね

1176D：う：：ん(.)そうなんですよね(.)たぶん(.)そういう(.)しゅぱしゃのまえに(.)たぶんと
うこうしたい(.)とか(.)そういうマンガ家になりたいとか(.)たくさん(.)いてて(.)そこ
って(.)そういう(.)友達が(.)そういう(.)おおおなじ夢をもてるひとと(.)であい

1177K：はい

1178D：チャンスがある(.)おおい

1179K：はい

1180D：たとおもいますけども(.)ほ：か [他] は(.)ほ：かはたぶんおなじだとおもいます

1181K：それは困ってないんですか？同じ夢を(.)目指している人がやっぱり少ないですよ
こっちは東京よりは困らない？

1182D：え：：ではネットで検索します

(中略)

1240D：でもマンガで(.)そんなに生活から(.)もらうもらうもんだと

1241K：うんうん

1242D：おもいます(.)どこでも

Dさんは、日本でマンガを描くことに関連して、友達が多い場所がよいだらう等の内容については言及をするが、住む場所としての東京の有利さについては限定的理解をしている。マンガ作品の投稿に有利であろうとされる東京でマンガを描かない理由としては、物価が高いなど外国人留学生にとっては生活しづらい環境が影響していること⁷もあるかもしれないが、デジタル化が進むマンガ業界においては、データでのやり取りが主となっていることをあげ、とくに東京にこだわって住む必要はないという。また、Dさんは、マンガ制作に影響を与えるマンガ家の友人達との交流についてもインターネットの活用で対応できるといふ。マンガの歴史をみると、マンガ家のアパートとして有名なトキワ荘⁸において、手塚治虫や石ノ森章太郎、藤子不二雄などが交流したこと、そのことが日本のマンガ史の重要な一部になっていることは有名である。しかし、今ではマンガ原稿の多くは電子データ化したうえでの送信が可能である。また、SNSを利用すれば、容易に世界各国のマンガ家と交流することも可能である。このように、Dさんは、デジタル化とIT化が進行するマンガ業界の世界的な潮流を肯定的に受け止めて評価しているのである。

しかし、マンガにおけるデジタル化とIT化は、作家の制作環境の改善にだけ結びついて

いるわけではない。マンガにおけるデジタル化とIT化は、その商品としての流通速度を高め、作品の消耗品化を促進し、評価を得た作家が安定的に売れ続けることを困難にする。このことを、Dさんは次のように語る。

【断片5】インタビューBより

436D：はいはいはい：：たぶんマンガってさ(.)たぶん一年二年くらい(.)はやる(.)そんなにながく(.)はやらな(.)ながいあいだ(.)そそそ

437Y：それはちょっと

438D：いまだけだとおもいます

(中略)

444D：うれしい(.)うれしいのがいちばんの目的

(中略)

478D：ちょっと(.)そうですね(.)みんな(.)マンガ以外にいそがしいことある(.)あるから

479Y：ん：：

480D：そんな真剣にマンガよまなくてもだいじょうぶっていう

作家の立場からするとマンガは芸術であり、持続的に称賛されるべき質をもった文化である。日本においては、手塚治虫文化賞、日本漫画家協会賞、各雑誌による新人漫画賞などによって、優秀なマンガ作品が毎年表彰され続けている。しかし、マンガはどうじに一過性の消耗品でもある。あるいは、媒体が紙から電子的なものに変化するなかで、消耗品としての性格を強めている。Dさんが、436Dで述べているように、長期的にはやるマンガが少なくなり、マンガの流行サイクルは短くなっているようなのである。そして、マンガの文化財性を軽視したような読者の行動もある(マンガをなめている読者!)。このことについて、Dさんは次のような発言をする。

【断片6】インタビューBより

489Y：そのすごくなんだろ：：好きな子たちが(.)なんだろこう好んで読んでいたものたちが時代と共に(.)なんかこの大切にされないじゃないけど

490D：でも(.)そうですね：：ちょっとマンガ(.)なめてる(.)なめされてる

491Y：なめられてる？

日本のマンガは、たしかに「マンガ」という一つの産業の一つの商品でしかない。Dさんの490Dの発言では、国際的に価値のある文化として日本マンガの位置づけと対比的なものとして、一時的な流行の対象という位置付けがあることへの戸惑いが、「なめている」といういささか強い表現の形をとって現れているのだともいえよう。⁹

次に、Dさんの異文化理解について、少し考えて行こう。日本人が使用する「外国人」およ

び「外人」という2つの言葉について、Dさんが、差別性があると批判するやり方が興味深い。そこでは、理解と評価の枠組として、自文化との対比（中国文化との対比）というやり方を利用しつつも、それなりに洗練したやり方で「批判」が組み立てられている。その様子を述べていこう。

2. Dさんの自文化中心主義的日本文化批判

2-1 「老外」と「外人」

【断片7】は、日本人が使う「外人」という言葉（語彙）についてのDさんの語りである。Dさんは、中国人が使う「老外」という言葉を引き合いに出し、そのことばと日本語における「外人」との違いについて語っている。Dさんはまず、中国人は外国人を「老外」と呼び敬っていることを伝える¹⁰。ついで、日本人が外国人を「外人」と呼ぶことを、直接的には否定しない形をとりながらも、つまりは、慎重に日本文化全体を批判する形にならないようにしながら、敬う気持ちが含まれた「老外」という言葉との対比を示すことによって、結果的に批判的含意を含ませた語りを形成していくのである。

【断片7】インタビューAより

506D：あの：：日本じん(.)ってさ(.)外国人と(.)がいじんと(.)よばれてまし(.)ましたよね？

507Y：あうんうんうん

508D：中国人(.)としたら：：これをよんでて(.)これはちょっと

509Y：うん

510D：親しい [かんじ(.))になってるんです [よ ((紙に『老外』という文字を書きながら))

511Y： [うん： [うんうんうんうん

512D：これはちょっと(.)外の人ってイメージが ((紙に『外人』という文字を書きながら))

513Y：強い？

514D：はい(.)でもこっち (『老外』) はちょっと(.)ちょっと友達みたいなかんじ

関連した議論がインターネットの言論空間上に散見されるので少し紹介すると、¹¹中国人が「老外」という言葉（語彙）で指し示す「外国人」は主に欧米人（アメリカ人）ではあるが、年配者の愛称として使用される「老」という語を頭につけることで、相手の存在を認めるといった意味合いを含ませている。これに対し、日本人が使用する「外国人」「外人」という言葉はそのような「相手の存在を認める」という含意が薄く、いささか差別的な意味合いを持つようにみえる、という意見がある。これらの見解と同様のことをDさんもまた述べているのだろう。すなわち、日本人が使用する「外人」という言葉について、512Dの下線部では、「外の人」というイメージがある、と述べている。また、その先に続くやりとりではYが「強い？」と述べているが、これは、Dさんが、その次に発言するであろうと予想され

た言葉を、すなわち、少々日本文化に対してみれば批判的に聞こえるはずの言葉を、先取りして発話したようにも見える。その証拠に、514Dにおいて、DさんはYの発話を否定することなく受け入れている。つまりは、日本人が使用する「外人」という言葉は、中国人が使用する「老外」とは異なり、外国人に対して優しくない意味合いを含む言葉であることが、慎重な言い回しのなかで表現されているようにみえるのだ。

もちろん、日本において、「外人」や「外国人」は一般的にニュートラルな意味合いでも使用されている。とはいえ、『広辞苑』(新村出編, 2008)にも「外人」は、①仲間以外の人、疎遠な人、②敵視すべき人、③外国人。異人と、幅広い意味を持った語彙として載せられている。いってみれば、日本において、「外人」という言葉は、ニュートラルにも、排外主義的にも使える、グレーゾーンの言葉なのである。この微妙さに見合った表現をDさんがしているとすれば、そのテクニック(中国での「老外」という言葉と「外人」を対比させて、少なくとも、中国語の「老外」とは違う側面が「外人」にはある、と主張するテクニック)は興味深いものであるように思われた。

なお、中国語の「老外」という語を構成する、「老」と「外」のそれぞれの意味は、『中国語大辞典』(1994)によると、次の様に説明がなされている。「老」については、①年をとっている、時を経ている。姓の前に置いて呼称として用いる。よく知っている年長の人に対して親しみが加わる②古い、ずっと前からある。と記載されている。また、「外」については、①そと、国外、よそ、自分の側ではない、外国、親密でない、つきあいが無い、除外を現わす、と記載されている。また、『中国語大辞典』では、「老外」は主に、欧米人を指す名詞であるとされている。つまり、中国人からすると、日本人は「老外」でなく、「日本人」なのである。だから、「老外」と「外人」では、それぞれの語が指し示すカテゴリーの範囲が違っているので、簡単には比較できない、ともいうことはできる。けれども、そのような比較の困難さのあるなかでは、Dさんの比較・対比テクニックは、相当に適切で、相当に洗練されたものといえるのではないだろうか。508Dにおいて、あえて冒頭で「中国人は」と、強調し発言することの意味を我々はそのように受けとったのである。

ところで、これらのやりとりの後で、Dさんは、中国語の「老」について、さらに以下のように言及している(【断片8】)。

【断片8】インタビューAより

515Y: え: : : このこの漢字っていうのは ((『老』を指しながら))

516D: あの: :

517Y: 他に(.)ん

518D: あの: : え: : : つとちよつと(.)せつめいする [の: : むずかしい(.)でも

519Y: [難しい?

520D: でもちよつと(.)でも

521Y: 近い?

522D：そうですね(.)友達みたいのかんじ

直接的には日本人が使用する「外人」という言葉を批判しないが、そこがターゲットになっているのは明らかだ。518Dのように「あの：：え：：とちょっと(.)せつめいするの(.)むずかしい(.)でも」という、言い淀みを伴った発言に続き、522Dの「友達みたいのかんじ」として、「老」を解説していく話の進め方は、それなりに洗練されたものといえるのではないだろうか。つまり、はっきりと断言をしない形で日本人が使用する「外人」という言葉がもっている排外主義的ニュアンスを批判することに成功しているようなのである。

中国も日本も「漢字」を使用している。しかし、同一の「漢字」であっても今ではそれぞれの国で違った意味が含意されるようになってきている。『老外』と『外人』という二つの「外国人」を指す言葉に関して、そのような文化差への説明の形を取りながら「意見」を述べるDさんのやり方は、繰り返しになるが、興味深い巧みさがあるように思われた。

もちろん、Dさんの語りを、「自文化中心主義的他文化批判」である、と捉えることも可能であろう。けれども、上述のような洗練性理解が可能な程度には、正直に、誠実に、自らの違和感を表示していると、Dさんの語りを評価することも、また、可能なのではないだろうか。

続けて、文化と言語の問題をDさんがどのように扱っているか、検討していこう。

広大な国土の中に多民族が存在する中国において、多数の少数民族がそれぞれに異なる言語を用いて暮らしているという状況が中国にはある。そのような中で、Dさんが、中国の国民性について語る場面を次にみていく。

2-2 Dさんにおける「少数民族の文化と中国の文化の関連」についての理解の表示

紙幅の関係で、引用しながら述べる余裕はないが、中国において、少数民族は、国の違いではなく、言語や行動、顔立ちなどといった文化の違いをもっているのだとDさんは主張する。そういう前提を置いた上で、【断片9】においてDさんは、中国人が他国の人を受け入れる国民性があると語り、それゆえ、異文化への理解が寛容である、と私たち日本人に説明する。

【断片9】インタビューAより

494D：はい(.)中国人は(.)外国人に(.)たいして(.)うけいれやすいだと(.)おもいます

495Y：えあ(.)何故うけいれやすい？

496D：なんでって(.)中国人(.)もともと友達がほしい

497Y：うん

498D：というイメージ(.)中国人・・もともと友達(.)をつくるの(.)つくるのは(.)はすきではないですかね

499Y：もともと(.)社交的というか？

500D : はい

501Y : もともと(.)こう(.)いろんな人と(.)こう(.)触れ合うのが大丈夫(.)関わるのが大丈夫?

502D : だいじょうぶ・・です(.)たぶん

中国の少数民族政策に関しては、批判が多く存在していることは承知している。けれども、Dさんの主張の根拠となる程度には、多民族・多言語社会が中国の国内に存在していることは認めてもよいだろう。つまり、中国人の“国民性”として、もし、異文化を受け入れやすい、という特徴があるとすれば、それは、50以上もの少数民族がカウントできる国として中国があるからである、という主張には、それなりの説得力がある。

もちろん、中国政府はインターネット上の情報流通を国家管理しようとしているし、テレビ等のメディア経由のものに関しても異文化からの流入制限をなしている事実¹²が存在している。それらのことも重要であり、したがって、そもそも中国を「異文化を受け入れる体制が不十分な国」と認定する立場もあるだろう。そのような理解にもつながるような疑念が495Yの発話に表されていると感じられなくもない。けれども、このYから表示された「疑念」に対し、Dさんは496D下線部にあるように、「なんでって」と、反論風に答えるのである。トランスクリプト記号の「下線」は声大きいことを意味するが、このように、声を大きくしてYに返答するのである。【断片9】がはらむそこはかたない緊張感は無視すべきではないだろう。

また、会話の冒頭でDさんが「中国人は」と発言していることにも、注目しておきたい。そのような前置きの発話をするので、「日本人とは違って中国人は」というカテゴリーの対比構造が、場面内で有意味なものとして、提起されているように思われるのである。これは、文脈的に「日本人批判を可能にする語り方」ともいえるだろう。

すこし根拠に欠けた妄想的推論をするのならば、E.サイドがオリエンタリズム的思考について、「東洋」というものが、西洋との対比のなかで、じっさいの東洋の多様性を無視した形で、あたかも1種類のものであるかのように扱われることがあることを皮肉っていたが、その指摘と同様の現象、すなわち、対比構造的表現による「カテゴリー内差異の消去現象」がここでも起きているように思われた。「オリエンタリズム」の議論の応用範囲は、なにも「西洋対東洋」の対比に限られるものではないのである。すなわち、この上述の会話に参加しているDさんと我々のように、アジア内の国同志を比較して論じる場合にも、同様の「カテゴリー内差異の消去現象」が発生するのである、ということができよう。つまり、中国と日本を対比して述べる2種の話者（中国人と日本人）は、相互に同型ではないにしろ、お互いにお互いの文化を類型化して対比的に表現している。今回のDさんの語り方の巧妙さのなかに、自文化と他文化を類型化し、対比するさまざまなバリエーションのうちのひとつのバリエーションの生成というのを見て取ることが可能だろう。とりわけ興味深いのは、Dさんの「中国」理解である。Dさんにとって、「中国文化の統一的性格」のうちの一つは、「他者を受け入れ易いこと」なのだが、この「統一的性格」こそは中国が「多

文化混淆的であること」に依拠して説明されているのである。これは、かなり洗練された物言いであると言えるのではないだろうか（「帝国」というものが、そういう「異種混淆的なもの」である、ということはあるけれども）。

2-3 Dさんによる「一人っ子政策とその影響」についての評価の表示

ついで、Dさんが、中国政府による一人っ子政策の影響について、自文化批判ぎみに話をしている場面を見ていく。

【断片10】インタビューAより

435D：ん：：ちょ(.)性格的に

436Y：うん

437D：ひとり(.)っ子のほうがちょっとなんなんすかね：：え：：つと：：え：：つとなんで
だすちょっと(.)こどもりよくない(.)ではないですか？

438Y：うん

439D：一人っ子でしたらちょっと：：えつと：：いえ：：うちの(.)いちばん(.)こども(.)こども
のくせに：：一番 家の一番(.)偉いものみたいになってる hh

440Y：あ：：なるほど(.)かわいなんだろ(.)ちょちょちよい(.)なんだろ

441D：かわい(.)かわいかって [る：：：：： やりす [き

442Y： [うんうんうんうん：： [あ過保護？＝

443D：＝はいはいはい(.)それは大きかったんですよ

一人っ子政策は、中国における 1979 年から 2015 年にかけての政策であり、現在は同政策に影響されたものとしての、少子化、生産年齢人口の減少、高齢化が社会問題となっている。現在、日本においても高齢化率は 26.7%と超高齢社会となっているが¹³、中国は急速に日本同様に上記の問題に直面しつつある。このような状況下で、Dさんは、一人っ子政策により過保護に育てられた現代の若者は自律心が養われておらず、この“子供力”のなさが中国社会の問題となっていると、自文化批判をしている。この会話において、Dさんは、中国人の代表として、公的に確定した中国の社会問題を「報告形式」で語っているのではなく、Dさん個人として、私的に評言を模索しながら中国の社会問題を「問答形式」で語っている。Dさんの 437D の文末の問いかけや、439D の途中の躊躇のようすをもとに考えるとそういえるように思われるのである。私たちは、ついつい、他国からの訪問者を、その国の代表として捉え、〇〇の国の〇〇さんというように、個人ではなく出身国を重視してその人を捉えがちであるが、ここでは Dさんは「中国＝Dさん」と捉えられるリスクを慎重に避けているようにみえる。

Dさんは、そのように特権的に自国のことを語る権利がある「自国人」としてではなく、そういう立場での発言と受けとられるような「表現の種類」を慎重に避けながら発言してい

るようにみえる。代わりにここでは、まずは「Dさん」として、留学先の日本で、自国である中国の一人っ子政策による影響を吟味しながら語っている「個人としてのDさん」であるようにみえるのである。このように、出身国と自己とを、慎重に切り離して語るやり方は、異国において、留学生としての自己の自立性を維持しつつ文化活動を継続するためのやり方としては、適切な方法であるように思われた。

Dさんの表現の意義について、確認しておこう。つまりDさんは、21世紀らしいコスモポリタンな志向性を持った留学生として、発話を組み立てているということもできるのではないだろうか。しかも、Dさんのコスモポリタンな、世界市民的な志向性は、中国文化と切れたものとして主張されているのではない。中国文化そのものがもつ多様性に依拠したコスモポリタンな志向性である可能性がある。そういう中国文化的多文化志向と日本的マンガ志向のアマルガムとして、Dさんの「日本的なマンガをかきたい」という願望が成立しているのではないだろうか。Dさんの発言は、その中国文化擁護と中国文化批判の両方が矛盾無く理解できるように精密にデザインされているように見える。どのように、日本文化擁護と日本文化批判の両方が矛盾無く理解できるように巧みにコントロールされているようにも見える。「日本的なマンガをかきたい」という願望を正当化するのは、上述のような、複雑だけれども精密に組み立てられた発話の構造のようにみえるが、その発話の構造こそは、言語的達成物として、Dさんの表現の中で産み出されたものなのではないだろうか。Dさんが留学生である、ということに注目するならば、中国というバックボーンはDさんの中に存在するものの、Dさん個人としてはそこから自由になれるようなものとして、中国文化と日本のマンガ文化が語られている、という整理もできよう。そういう整理をすれば、ここに一つの留学生の自己語りのやり方の典型をみることも可能なように思われた。

3. まとめに代えて：Dさんの闘い

インタビューでは、Dさんは日本に留学した二つの理由を、はっきりと私たちに語ってくれている。一つ目は、日本の文化を学ぶため、そして二つ目はマンガを描くためである。だからといって、出身国の文化を否定的に扱って、日本文化のみを一方向的に肯定的に扱っているのか、というとそんなことは無かった。2節までは、そういうDさんのハイブリッドさが、どのような表現の工夫とともに達成されているのか、を見てきた。さいごに、そのようなハイブリッドさの基盤としての「留学生」というポジション性がどのように現れているかを見ておこう。そこに、表だって明確に現れているわけではないものの、「Dさんの闘い」が見て取れるように思われるのだ。

Dさんとの対話の中で気になったこととして、【断片11】にみるように、それまでの平叙な語り口調が、1252Dの発言の部分で、留学の目的を語る際には、かなり緊張感の伴った丁寧な語り口調へと変化したことがある。これはいったいどういうことなのだろうか。

【断片11】インタビューAより

日本的なマンガを描きたい

1251Y：神戸の(.)外語大を選んだ理由っていうのは？誰か知り合いがいたとか 勧められたとか？

1252D：えと(.)日本ぶんかきょうみある(.)日本ぶんかにもきよきよきよきょうみあります(.)いろいろマンガ以外のことも勉強したいとおもってます

1253Y：それは(.)外語大で(.)できる？

1254D：そうです

1255Y：あ(.)他の大学に行きたいとかは無かった？日本の中の

1256D：いあ：：ま：：日本文化にかんする(.)勉強：：そこができれば(.)とくに(.)こだわってないみたいな hh

他国の人々が、日本に留学した場合、留学する理由を聞かれる機会は大量に存在することだろう。しかも、聞き手は多様である。とすると、留学理由を説明する際には、万人に受け入れられやすい理由を答えることが第一選択になるであろう。そして、そういう「定型性」、「公式性」が伴った返事をする場合には、回答の相手が親しくない場合も多いだろうから、「語りのモード」が「丁寧語モード」になったとしてもおかしくはない。まずはそのように解釈できそうだが、しかし、【断片 11】に現れている、この緊張感は何なのだろうか。

「自己を語るにふさわしい出来事や体験はなにか、まず典型的には、だれもがその人の経歴として認め、社会的に期待されている出来事や体験があげられる」と桜井(2002)が述べるように、Dさんは、社会的に認められる理由を答える方向に強く促されているはずだ。そして、1252Dで発言するDさんの語り口からほの見えるのは、Dさんにとって「社会的に期待されている」理由として語るべきなのは、マンガよりも文化の方だ、と理解されている、ということなのではないだろうか。Dさんの「マンガ以外のことも」という、マンガとの対比を強調した発言の仕方が指し示しているのは、留学理由として「マンガ」を挙げるだけでは一般性が十分ではない、とDさんが感じているということであろう。

もっとうがった見方をするのなら、日本の大学の大学院に在籍している、その名目でビザを取っているDさんにとって、マンガを描くことだけを訪日の目的にしてしまうことは社会的に不利な立場を導くリスクがあることであり、そのため、一種の防衛策として、この部分の発言がなされている、ともいえよう。防衛策を述べる緊張感が、【断片 11】内の発言における口調の敬語化と、緊張した様子の中に見て取れるように思われるのである。

長時間のインタビューを通してDさんは、リスクを侵さずに語ることができる「十八番(おはこ)」の、定型的語りではなく、不定形な語りを大量に行ってくれた。すなわち、一回目の語りに納得しない聞き手に、補充的な2回目の語りをすることでもって補いをしなければならぬような、本音っぽい語りを、してくれていた。その本音っぽい語りの中では、「日本で日本的マンガを描きたい」という意思とその背後の諸物についてのDさんの理解が、強い具体性と独自性を帯びて語られていた。自由になる生活時間のほとんどは、マンガを画くことに関連したことがらに対して費やされており、関西の観光地の話題を振ってもDさ

んが乗ってくることはなかった。

そういう「本音語り」のなかでの「敬語語り」(【断片 11】)の存在は、つまりは、Dさんが当たり前に与えられた環境のなかで「マンガを画いている」のではなく、「中国人」で「留学生」で「日本文化を研究する大学院生」であるなかで、いろんな工夫をしながら、他者理解や自己理解を、妥当なものとなるように、精密に組み立てながら、そうやって自らの文化的ポジションを適切なものになるように、日々再構成しながら「マンガを画いている」ということの証拠であるように思われたのである。

今回のインタビューは、Dさんの聡明さがどんどん露わになって、それに我々が繰り返し驚かされるというインタビューであったが、Dさんは、ただ聡明であるだけでなく、闘う人でもあったのではないかと。そのようにも最終的に感じられたインタビューだった。あるいは、闘う環境に置かれていることが、Dさんの聡明さをより高度なものにしている、ようにも感じられた。インタビューを終わって「Dさんの画業に大成あれ」と願っている。

注記

- 1 ロシア人留学生 Mさんと山崎との対話の分析については『現象と秩序』第4号掲載の(山崎, 2016)を参照いただきたい。
- 2 このインタビューの全体は、現在準備中の『現象と秩序』6号(補遺版)、に掲載の予定である。なお、補遺版は、紙版は発行されず、WEB版のみの発行となる見込みであり、その公開URLについては、次号(『現象と秩序』7号)において、「編集後記」に記載される予定となっている。
また、各「断片」において採用されている「トランスクリプト記号」は、複数行にまたがった“[”がオーバーラップの開始位置を表示するなど、エスノメソドロジー・会話分析において、標準的なものである。くわしくは、西阪仰(千葉大学)によって公開されているWEBサイト(<http://www.augnishizaka.com/transsym.htm>)等を見よ。「日本EMCA研究会」のオフィシャルサイト(<http://emca.jp/>)には、エスノメソドロジー・会話分析に関する基本的な説明が掲載されている。
- 3 大城・一木・本浜編(2010)『マンガは越境する!』は、「海外では、私たちが日本で読んでいるのと同じ形でマンガ作品が読まれることはほとんどない。(中略)言うまでもなく翻訳マンガはテキスト部分の言語が異なっている。翻訳者のたゆまない努力があるとは言え。言語の変換が伴う作品の質の変化は小さいものではない。また、ほとんどがタテ書きで書かれていた日本語が、翻訳されるとヨコ書きになることも重要だ。近年は多くのマンガが右開きになったが、かつては左から右に流れる横文字に合わせ、ページ全体を逆転にしたうえで、左開きに製本することが普通であった。そうすることで、キャラクターが左利きになるという事態も起きていた。近年は、日本と同じ右開きのものが増えてきたが、それでも、一コマ一コマの絵の完成度よりも、コマとコマのつながり、ページ全体の中での流れこそを重視する日本マンガにとっては、すべての要素が右→左、上→下という形で構成された流れの中に左→右という横文字が入ることは、作品の質を変形させる可能性が十分ある」(大城・一木・本浜編, 2010: 10f.)と指摘している。

-
- ⁴ 転写文（トランスクリプト）中の [] 内は、本稿著者による注記である。
- ⁵ 経済産業省の HP 内の「コンテンツ産業の現状と今後の発展の方向性」では、アニメ・マンガが、日本が誇る文化産業であることが指摘されている。2016年12月更新。
http://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/contents/downloadfiles/shokanjikou.pdf
- ⁶ 日本のマンガ市場については、インターネット上の Manga Labo 「世界のマンガ市場は 7兆6700億円のポテンシャル？（GDP換算で試算）なんと日本の19倍!!」掲載の記事が詳しい。2016.1.22更新。
<https://whomor.com/manga/?p=1721>
- ⁷ 日本学生支援機構（JASSO）「平成27年年度私費外国人留学生生活実態調査概要」掲載の留学生7000人へのアンケート調査によると、留学後の苦勞について一番多かった回答は、物価が高い（70.5%）であった。また、関東圏の生活費が154,000円と全国で最も高く、四国圏が104,000円と最も低いとの統計結果も示されている。
http://www.jasso.go.jp/about/statistics/ryuj_chosa/h27.html
- ⁸ 「トキワ荘」は、東京都豊島区に1952年～1982年に存在していた木造アパートであり、学童社が自社の雑誌に連載を持つ作家達、すなわち手塚治虫などの漫画家を入居させていたアパートである。また、このトキワ荘には、マンガ家の仲間たちが多く訪れていたが、その様子は、伊吹隼人(2010)『「トキワ荘」無頼派—漫画家・森安なおや伝』に魅力的に描かれている。
- ⁹ 夏目房之介(2004)『マンガ学の挑戦』は、日本のマンガの歴史について、読み捨ての娯楽マンガ、あるいは子供だましにすぎないものから、文化的、経済的にもメディアとして一定の認知をされるものになってきた流れがあると述べており、また、竹内オサム(2009)『本流！マンガ学』は、文庫の流行によってマンガの豊かさが増すとは思えないと指摘している。
- ¹⁰ 中国語における「老外」にも、用法として「素人」であるとか、「部外者」であるとかという意味が存在している、という（BitEX 中国語 イーチャイナアカデミー、n.d.）。したがって、ここでの D さんの理解とは異なる理解を組み立てることも可能だろう。つまり、「老外」と「外人」の違いは、語の意味範囲の違い（意味論上の違い）というよりは、誰を対象にどのような状況で当該の語を用いるのか、ということに関する語用論上の違いであると。しかし、それは本稿の課題ではない。
- ¹¹ 日本人や中国人が外国人を「外人」や「老外」と呼ぶことについての記載をインターネット上で検索すると、以下の2つの記事が見いだされた。
- ①中国語学習ジャーナル Chinese Station, 「中国人である私からみた日本-序-」2014.6.4更新。
<http://www.ch-station.org/fchn001/>
- ②呂先生の中国語ブログ, 「外人」「外国人」「外国の人」「外国の方」「向こうの人」, 2010.3.4更新。
<http://blog.goo.ne.jp/lvxiaolin/g/e/456381ddffa2db7d3292d246cfac6af1>
- どちらの記事からも、「外国人」関連の用語の使用には細心の注意が必要である、ということがわかる。なお、日本語教員養成の世界では、「外人」ではなく「外国人」という用語の使用が推奨されているようである。
- ¹² 例えば、海外のテレビドラマやアニメの放送時間については、夜7時から10時の間、放送制限がなされていると報道されている。NHK ONLINE. NHK 文研, 「中国におけるテレビドラマ放映に関する取りきめに関するニュース」2012.12月更新。

<https://www.nhk.or.jp/bunken/summary/research/focus/472.html>

¹³ 内閣府ホームページ内の、『平成 28 年版高齢社会白書〔概要版〕』の第 1 節「高齢化の状況報告」によると、2015 年の日本の高齢化率は 26.7%であり、日本が超高齢社会であることを示している。世界の主要国の高齢化率との比較をしてみると、日本の高齢化率は世界第 1 位である。

http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/html/gaiyou/s1_1.html

文献 (50 音順)

- 伊藤剛,2007,『マンガは変わる』,青土社.
- 大崎正瑠,2008,「日本・韓国・中国における「ウチ」と「ソト」」,『東京経済大学人文自然科学論集』, 125 : 105-127.
- 大城房美・一木順・本浜秀彦編,2010,『マンガは越境する!』,世界思想社.
- 岡田斗司夫,1996,『オタク学入門』,新潮社.
- 岡本佐智子,2009,「不適切な」日本語表現考」,『北海道文教大学論集』10:63-73.
- 小山昌宏,2007,『戦後日本マンガ論争史』,現代書館.
- 坂田史,2009,「コミュニケーションの場「外人/gaijin」が映し出す日本人と白人の相互関係」,『ヒューマン・コミュニケーション研究』37 : 131-150.
- 桜井厚,2001,『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』,せりか書房.
- 新村出編,2008,『広辞苑 (第 6 版)』,岩波書店.
- 菅谷ジャン・マリア・パトリック,2012,「差別用語—「外人」と「外国人」—」,『国文学論輯』33:87-106.
- 情報通信総合研究所編,2012,『情報通信アウトLOOK 2013 ビッグデータが社会を変える』, NTT 出版.
- 大東文化大学中国語大辞典編纂室編,1994,『中国語大辞典』,角川書店.
- 竹内オサム,1995,『戦後マンガ 50 年史』,筑摩書房.
- 竹内オサム,2009,『本流! マンガ学 マンガ研究ハンドブック』,晃洋書房.
- 田中仁・菊池一隆・加藤弘之・日野みどり・岡本隆司,2012,『新・図説 中国近現代史 日中新時代の見取図』,法律文化社.
- 中野晴行,2009,『マンガ進化論 コンテンツビジネスはマンガから生まれる!』,ブルース・インターアクションズ.
- 夏目房之介,2004,『マンガ学への挑戦 進化する批評地図』,NTT 出版.
- 能智正博,2011,『臨床心理学をまなぶ 6 質的研究法』,東京大学出版会.
- 馬場公彦,2014,『現代日本人の中国像 日中国交正常化から天安門事件・天皇訪中まで』,新曜社.
- BitEX 中国語 イーチャイナアカデミー, n.d., BitEX 中国語 イーチャイナアカデミー (中国語学習サイト), (閲覧日 2016.12.6)
<https://bitex-cn.com/?m=Dic&a=worddetail&wordid=76748>
- 山崎てるみ,2016,「異文化理解が会話に現れる様子—ロシア人留学生 M さんと私の対話から—」,『現象と秩序』4:81-97.
- 吉村和馬編,2008,『マンガの教科書 マンガの歴史がわかる 60 話』,臨川書店.

付記

本研究はJSPS 科研費 JP16K13421,JP15H03411 からの援助および、神戸研究学園都市大学交流推進協議会の「未来の学園都市—世代間・異文化間・大学内外間交流の促進による健康で多文化共生的な学園都市的食生活を，生協食堂における『健康栄養相談会のワークショップ化』を通して獲得する—共同研究班」事業（2015-2017）（代表研究者：檜田美雄）からの援助を受けて行われた研究に基づいています。記して支援に感謝します。

【編集後記】

『現象と秩序』第6号をお届けします。巻頭の村中論文は、関西方言に関する研究です。本誌は、『執筆要領』にもあるとおり、人文科学・社会科学の多くの領域の議論に開かれています。また、抜刷代わりに著者の方にはPDF版の配布をおこなっており、そのコピー及び再配布は自由となっております。ふるってご執筆ください。2番目の樫田論文は、『保健医療社会学論集』27巻2号に掲載された「論文投稿支援ワークショップ」実施報告の4論文に関しての、コメントをまとめたものです。『保健医療社会学論集』の当該号は、2018年9月まではWEB公開されませんが（公開までの期間の短縮を検討中）、全国の多くの大学図書館には所蔵されています。本論文と一緒に見て頂けるとより活用しやすくなると思われます。3番目の山田・樫田論文は、吃音に関しての社会学的研究です。病因論や治療論とは別の社会学的研究が吃音に関して可能であることを証明しようとした論文です。「表1」だけでも見て、興味をもった「吃音者の工夫」に関して、その該当箇所を読んで頂けると幸いです。吃音はコミュニケーションの障害なので、その症状も、症状に対処するための工夫も、いずれも社会（学）的現象なのです。新領域開拓的研究は、本誌の得意とするところです。ご堪能下さい。最後の山崎・樫田論文も、新領域開拓的研究として載せています。日本語の文法や語彙が完全ではないインタビューイヤーであったとしても、使える資源を総動員して、意味の会話的達成を行おうとしています。その努力に応える社会学をなんとか構想し、実践したいと考えて書きました。

次号には、「学園都市的食文化を考える」という特集（仮題）が組まれる予定になっています。また、単発の論文としては、家族内会話をめぐる分析、車イスバスケットボール研究、ALS在宅療養研究等が載る予定です。ご期待ください。（Y.K.）

『現象と秩序』編集委員会（2017年度）

編集委員：樫田美雄（神戸市看護大学）、中塚朋子（就実大学）、堀田裕子（愛知学泉大学）

編集幹事：坂根杏奈（神戸市外国語大学）、平田菜津子（神戸市外国語大学）

編集協力・印刷協力：村中淑子（桃山学院大学）

『現象と秩序』第6号（第2版）

※改訂箇所：第1論文の表7と表9が頁をまたがっていたため行送りを修正した。

2017年 3月31日発行→2017年11月14日第2版発行（WEB版のみ、11～13頁のみ改訂）

発行所 〒651-2103 神戸市西区学園西町 3-4

神戸市看護大学 樫田研究室内 現象と秩序企画編集室

電話・FAX) 078-794-8074（樫田研）,e-mail: kashida.yoshio@nifty.ne.jp

PRINT ISSN : 2188-9848

ONLINE ISSN : 2188-9856

<http://kashida-yoshio.com/gensho/gensho.html>